

英國列島
蘇格蘭資料級

物理

91

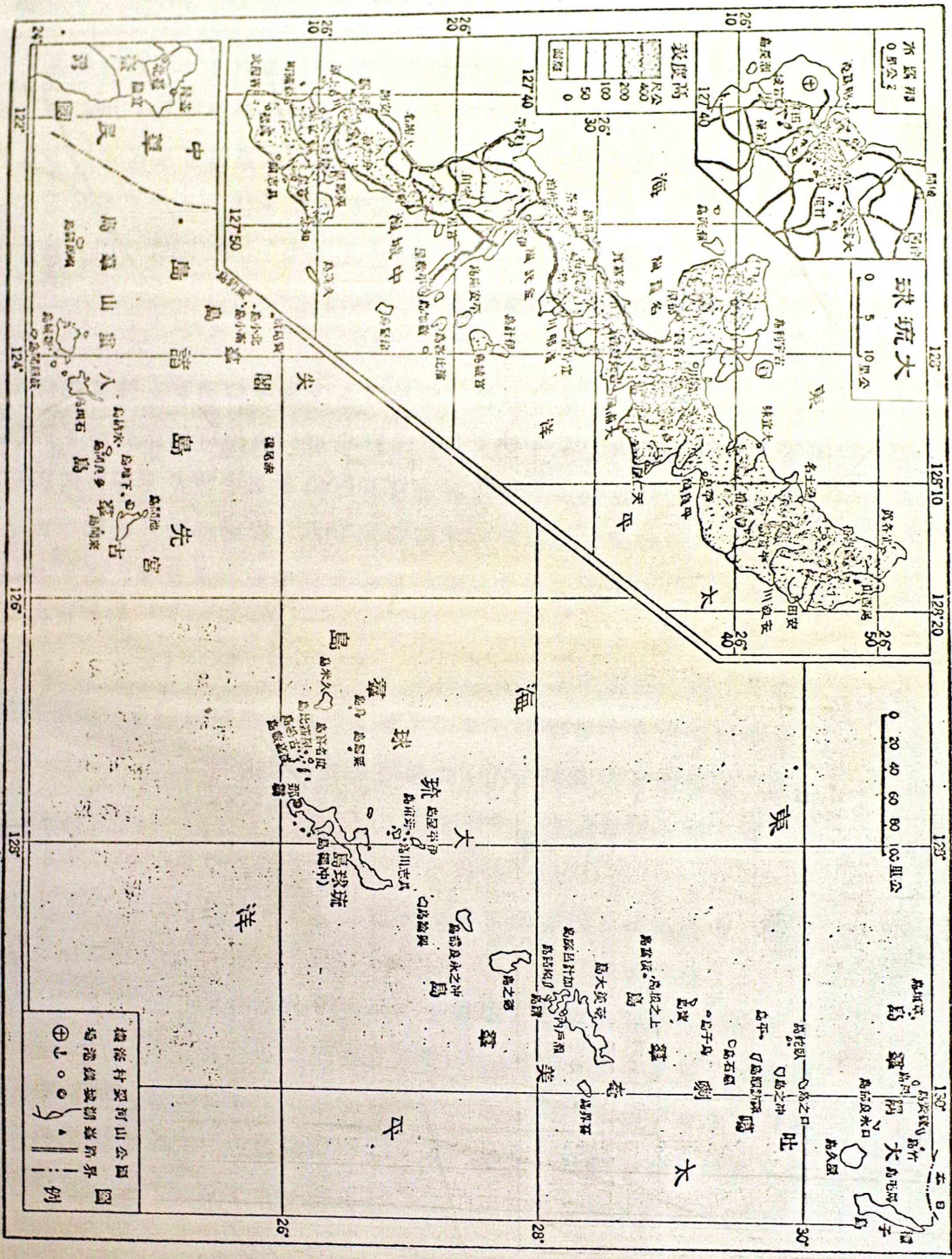
1971. 5. 29 程命燮

第四册

国民中学 地 理 第四册 (全六册)

国立編訳館 主 編

中華民國 5 9 年 (昭和 4 5 年) 1 月初版



琉球大形圖

一九〇年一月發行中國地理學用圖定教部

尖閣群島標柱建立日程表

日次	出発地、時刻	着地、時刻	標柱建立 の島名	作業時間	摘要	宿泊所
59 第1日	石垣港、17:00					船中宿泊
10 第2日		魚釣島 7:00	魚釣島	3時間	午前4時 作業開始	
	奥釣島 11:00	北小島 11:30	北小島	2時間		
	北小島 12:30	南小島 14:00	南小島	2時間	昼食は船中	
	南小島 16:00	久場島 18:50				久場島では 船中
11 第3日			久場島	2時間	午前4時 作業開始	
	久場島 10:00	天正島 17:00	天正島	2時間	昼食は船中	
	天正島 19:00					船中
12 第4日		石垣港 10:00				

註 各島の距離(图上測定)と航行時間

石垣港	魚釣島	175K	140分
魚釣島	北小島	6K	25分
北小島	南小島	2K	25分
南小島	久場島	28K	25分
久場島	天正島	90K	70分
天正島	石垣港	195K	150分

※ 船の速度は毎時

7ノット

(13Km)計算した

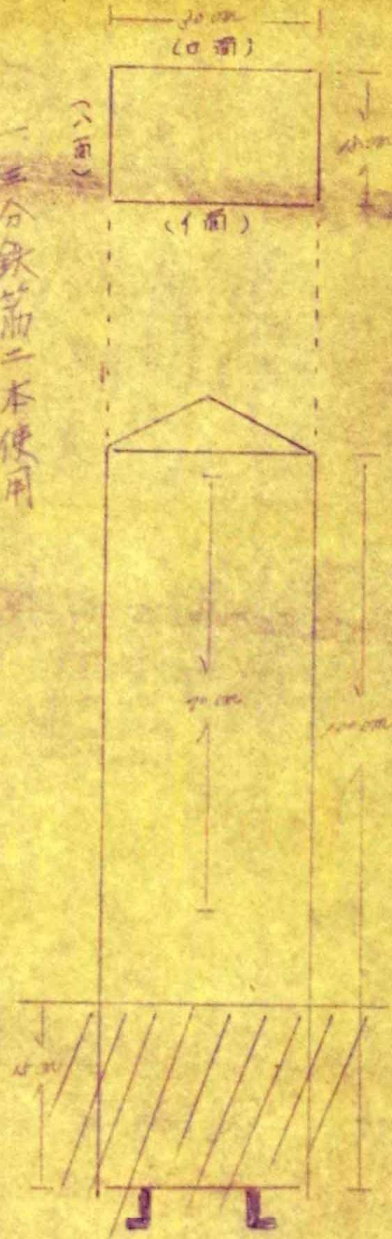
一 (イ) 面
一 (ロ) 面
一 (ハ) 面

石垣市建之

沖繩縣
石垣市 栄登野成 二三九番地

八重山
大因群島
魚釣島

(イ) 三分鉄筋二本使用
アンクリート配合は一三四上す



北 南 大 久 魚
小 小 正 場 釣
島 島 島 島 島
二三九一 二三九〇 二三九四 二三九三 二三九二

各島標柱及心冠靈碑建立參加者

※市關係者

市長 石垣喜興 ✓

市議員 新垣 鮎 詠 ✓

市議員 下地 盛 男 詠 ✓

~~下地 志 林~~

下地 広 三 ✓

源 河 達 雄 ✓

※報道関係者

沖繩 名 云 崎 山 宗 彦 ✓

琉球 新 報 米 城 惠 ✓

OHK 真 栄 城 伸 ✓

釜山 日 甲 報 義 勲 勝 ✓

南 西 新 報 下 地 義 勲 男 ✓

~~南 西 新 報 下 地 義 勲 男~~

尖閣群島遭難者慰靈碑建立計画

一日程

五月九日午後三時之四時慰靈祭執行(樵林寺)

今日午後五時

石垣港発

五月十日午前七時

魚釣島着

同島に碑建立(約三時間)

今日午前七時

魚釣島発

今日午後七時

石垣港着

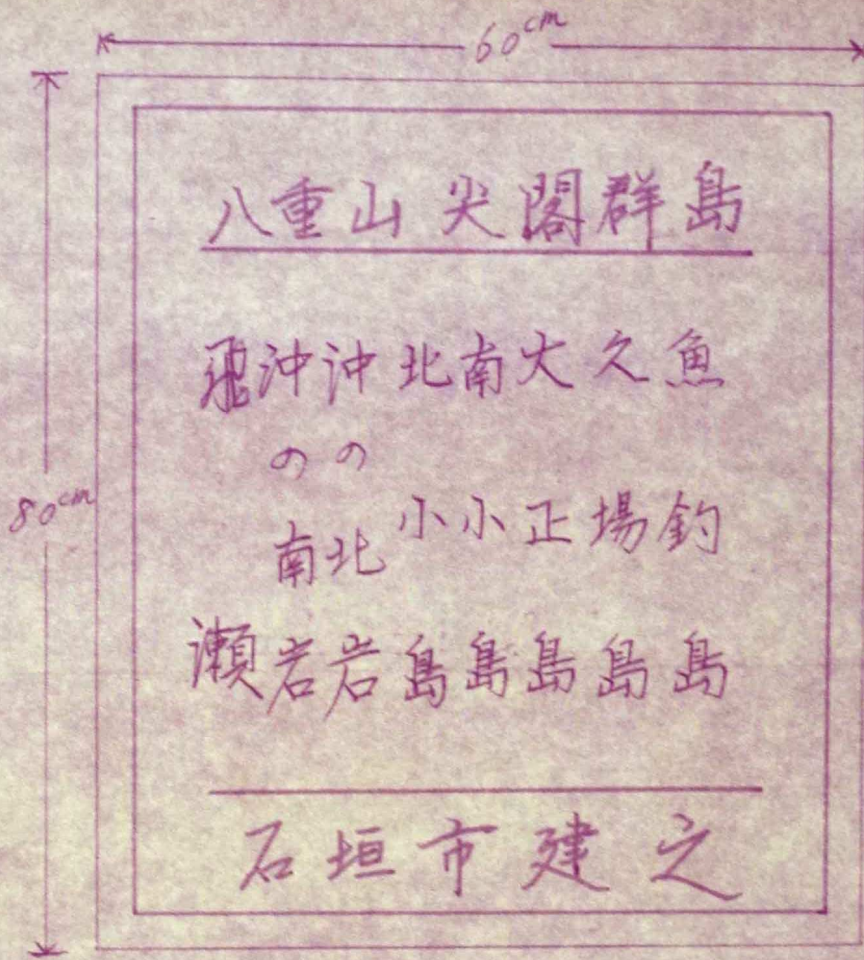
現地は越之遺族代表者

石垣市

平良市

石垣市

平良市



魚釣島に建てる
 (大垣石彫刻)

同意第二九号ノ第三一号

寄附採納について

左記のとおり尖閣群島遺難物故者慰靈碑建立費として寄附採納願ひ
がありますのでこれを採納いたしたく、議会の同意を求めます。

一九六九年五月三〇日提出

石垣市長 石垣 喜興

石垣市議会議長
小底 貞一 殿

記

番 号	金 額	住 所	氏 名
第二九号	一〇九萬圓〇千圓	石垣市	[Redacted]
第三〇号	一〇〇万也	平良市	[Redacted]
第三一号	一〇万也	石垣市	[Redacted]

34390
109,000
100,000
石垣 (喜興)

寄附採納願

尖閣群島環礁物故者慰靈碑建立費として金百九弗四拾仙也を石垣市に寄附したいと思ひますから御採納下さいますようお願い申し上げます。

一九六九年五月三十日

石垣市

石垣市長 石垣 喜康 敬

寄附採納願

尖閣群島遭難物故者慰靈碑建立費として金百弗也を石垣市に寄附した
いと思ひますから御採納下さいませようお願ひ申し上げます。

一九六九年五月三十日

平良市

石垣市長 石垣 喜興 殿

寄附採納願

尖閣群島遭難物故者慰靈碑建立費として金拾弗也を石
垣市に寄附したいと思えますから御採納下さいますよう
お願ひ申し上げます。

一九六九年五月三十日

石垣市

石垣市長 石垣喜興 殿

國際地質考察表 瓦家奇編

46 地区		N	E	海拔
692	台北 Taipei	25.02	121.31	8 米
694	基隆 Keelung	25.05	121.45	3
695	彭佳嶼 Penkiayu (Pinnacle Is)	25.35	122.04	99
762	蘭嶼 Lanyu	22.02	121.42	323
763	花蓮 Hualien	23.55	121.37	15
47 912	与那志島 Yonaguni-shima			
916	龜釣島 Uotsuri-shima	24.25	123.01	30
		25.46	123.31	5
915	石垣島 Ishigaki-shima			
		24.20	124.10	7
927	宮古島 Miyako-jima			
		24.47	125.17	40

昭和34年3月改正 船舶瓦家奇編

一九五九年五月十五日

尖岡群虫標柱建之報告書

新北
仙水
高岩
方治

① 尖岡
② 新北
③ 仙水
④ 高岩
⑤ 方治
⑥ 尖岡

1969年5月15日

石垣市長 石垣喜興 殿

尖閣群島標柱建立報告書

石垣市長の命を受け尖閣群島に標柱を建て行政区域を明示すると共に昭和20年7月同群島付近で疎開中に遭難した。遭難者の霊を供養する慰霊碑を建立する目的で別紙日程表により、第三協栄丸(14.64トン)と第三住吉丸(56.73トン)を備船して、1969年5月9日PM5時出港予定にて準備完了をした。

同日PM3時から桃林寺に於いて尖閣群島遭難者合同慰霊祭がおこなわれた。

出発にさいし標柱建立代表者、新垣仙永氏は船員、船員に対し交通の便がないため普通の人々が行くことのできない、彼方の夢の島であり無人島である。

第三協栄丸、第三住吉丸は備船されたことはお解りのことと思ふ。この度は石垣市長の命を受けて尖閣群島に慰霊碑及石垣市の行政区域を明確にするため標柱の建立をする。海路行程は495Kとなり3泊4日の日程に従い行動す。行動に就ては全員が責任をもって標柱を建立する様に尚注意することは標柱を建立する時は

いろいろ困難なことが生じると思ふ、標柱建立が目的だから是非責任をもって努力するよう全員の協力を求めた。

9日 第三協栄丸は9日 PM5時 尖周群島向け石垣港を出港、第三佳吉丸は同日 PM5時20分出港。

風速6m 雲空、南東の風、波はおだやか。

屋良部岬を基点に針路は335° バイスリーコーナーV 向け航行、PM7時20分 第三佳吉丸に追い越

される。海上の波はおだやかである。船の進路について潮流はNE 2~3 と見る。夜中、夜明けは肌寒い。

10日 AM5時から 北小島、南小島、真釣島が見える。右舷斜前方に第三佳吉丸が見える。

真釣島に針路を向け両船南北に別れて航行する。

南小島、北小島は大きな岩石がそそり立ち洞窟が二、三個所にある。北小島の潮流がはげしく船は進まない。飛瀬近く真釣島が見える。

真釣島は激陰を見る頑丈の岩石の島で群生するクバの暗緑色に覆われ雲がかつた山々を右舷に見ながら海に無数群れとぶ海どりの群れを押し切って航行す。真釣島の両側のなだらかなところに田跡、思いだす古賀善次さんの鰹製造工場の跡が残っている。

同日 AM 7時、真釣島の南側 200^m 沖の海上に到着
投錨致しました。

真釣島は尖閣群島五島、共の他沖の北岩、沖の南岩、
飛瀬の中最大の島で周囲は岩石で砂浜は殆んど
なく岩石が切り立って海岸線の海の深さは100^mも
あろうかと思われる程黒潮で船を着ける箇所がなく
大正10年頃古賀善次さんが鰹製造業を経営していた工場
の跡付近に僅かばかりの砂浜が見られ、船を着ける
ことは困難で危険な所である、然しながら小舟は着ける
ことが出来ます。

真釣島の標柱と戦争中遭難者の慰霊碑を第三佐吉丸
より小舟に積みかえ、標柱と慰霊碑を建立致しました。

真釣島の
240建立

同日 AM 11時 真釣島の建立を終え、石垣市長及び
潰族代表並びに報道関係者は第三佐吉丸に乗船石垣
港へ向け帰路致しました。

新垣仙永外船員7名及び市職員4名は第三協栄丸
に乗船して同日 AM 12時 南小島に向け出発致し
PM 2時頃 南小島に到着、南小島は岩石が切り立
って岩石の高さは140^mもあろうかと思われ、その岩石
の上には海鳥の巣窟になっている。

小舟で島の海岸線を一巡し陸揚げする場所を
選定して協栄丸から南小島の標柱を小舟に積みかえ

標柱を陸上げて標柱を無事建立致しました。

天候が悪く雨めのため作業員はすぶ濡れになって作業が思ふ様に出来なかった。

引き続き北小島の標柱を無事建立して、PM5時頃一行は協栄丸で久場島に向け出発した。

同日PM7時久場島に到着島から200^m沖の海上に投錨協栄丸で一泊致しました。

11日AM7時小舟で久場島の周囲を一巡して標柱を陸上げる箇所を物色送定して標柱を協栄丸から小舟に積みかえ久場島の標柱を無事建立した。

久場島の大きさは真釣島に次ぐ第二の大きい島で島の中央部にはくばと雑木、雑草が叢生し海岸線には岩石が切り立って高さ100^m余もあろうかと思われる岩石の上には海鳥の巣窟になっている。

同日AM10時、作業員全員で小舟を協栄丸に積み上げしっかりとロープで小舟をくくり付け大正島へ向け出発した。

同日PM5時頃大正島に到着。

大正島は海拔100^mもあろうかと思われる岩石の島である。第三協栄丸で大正島の周囲を一巡して標柱を陸上げる箇所を送定し、大正島から150^m沖の海上に投錨して、全員で小舟を第三協栄丸から降して、

大正島の標柱を小舟に積みかえ、ロープで標柱の両はしをくり高さ5mの岩石の上に引き上げ

同日PM6時頃無事大正島の標柱を建立した。

この大正島は岩石が切り立った島で草木はなく島全体が海鳥の巣窟となっている。

作業終了後一行は大正島の沖合で一泊す。

12日AM7時、石垣港へ向け帰路、出発す。

出発後天候が悪化し海上は時化になり市職員はその為め船酔いを感じた。

時化のため大正島から出発して17時間を要しPM12時石垣港に全員無事到着致しました。

以上をもつて報告と致します。

石垣市議会議員 新垣仙永

石垣市固定資産評価員、税務課長、高嶺方治

〔注〕 標柱を建立するに当り石垣島よりセメント及び砂を持参して標柱と岩石とを密着させるため各島の岩石の上を削り栗石とモルタルで堅固に建立した。

一九二九年五月

文國禎公標在建立軍級
進維者慈靈碑建立軍級

物也勿役

Handwritten notes at the top of the page, including the date '1969. 4. 23' in red ink.

1969. 4. 23

1冊 368字 (23x18.5)

368字 x 12 = 4416字

台灣殊閑追憶
紅
無人島漂流記
十世
高良尚智

Vertical handwritten notes on the right side of the page, including the characters '友' and '心', and some other illegible characters.

B 29

世界大戦 太平洋戦争の時の

台湾疎開追憶 (一九四八年十月廿八日記ス)

気は早水と今日も延期又延期と再三延期せし台湾疎開

も愈々昭和三十年十月廿九日午後九時頃舟出す事となつた

疎開人員は殆ど婦女子と子供で男は少数の六十才以上

ある六十才未満も二三人居たが多分戦國も不適宜の

弱体者であつたと思ふ總教員百十人位

私は若く歳方才で満六十才も足りなかつたが老父母と近親の

老妾の嬰の付添で又總教の半教を有する宇治川班の

班長として疎開する事となつた

妻と子供三人(妻ハキキ)を榎橋より二里奥の白水山の

疎開の家に残し前記三人の老人を守護し乗船したの

である 妻子四人は次便より疎開すること 先行の松原

其の二 自治の道を擯ずることとした

榎橋は留守留陽(子才未滿の男子)の夫や父が可愛い

妻子との別れを惜み名を呼び合ふて居り去つた

其の日の夕方舟は西表島舟浮港に投擲二晩碇船

九時... 毎... 統計... 夕方... 1

七月二日の二隻、舟浮庵を去港したのである。

五日等疎開者の舟團（三隻五隻のポンポン舟二隻）は4日陸

へ直航他の軍人軍山の舟は奥耶玉島經由佐津へ向

ふ事になった。一同潜水艦の籠装敷平を又又柄み正の

一踏舞事安着する様神々祈願し色ら一日千秋の

思ひで安着の日を待って居たのである。

如かサア大妻だ七月三日の午後二時頃、遠く爆音と共に

機影を榮見したのである。呼喚、銃は終りた大洋の

真唯中た防立ゴ、もたければ身を隠す叢もな、一同絶

望の測る油むれ死、一生も望、薄の、機影を見るのも多

持ちが悪ひ、舟倉を振へる成行き、まかすのみ

爆音音が大きく聞ゆると苦、機銃の音が連続、聞ゆると

同時、右側の安さんが一声叫んだま、打伏して銃ひ左

の鬼かやられ、前の人が重傷を蒙り、唸り出した。

舟中舟内は、機銃の為め破壊、時、嘔吐、味、嘔と血、順と

の混合汁が出来る、状態、し、かた、惨、凄、な、あり、様、で、あ、つ、た

私に無き意識と舟倉を飛ばしデッキに出ると其処に
 既に葦を乱して絶命して居る者が多数あり手頸を
 取られて呻き悶えて居る者もあり予は無き意識
 と海中に飛ば込んだ 見ると近くは舟のタンブルの甚だ
 (一周四方位の板蓋)と三四人纏って居る 私も其の中に入り
 ました

其等の人には舟倉と見えて素人の私に注意を促した
 舟は近寄ると機銃がやられる 舟より遠く海内れると大
 洋の真唯中で助かる見込みはない故に舟は近寄らず
 海内れると適宜の巨砲で舟を追ひ行く様よこの事であ
 った(わ)

他の舟は如何ならんと見ればこゝ如何と早や舟火
 事を起し乗員は皆デッキに出て火を追ひまくられ
 舟尾より舟首へ次々追込まれ最早や行く可き処の
 ない船は全く繪も見た地獄の火あぶり其つまであった
 とく、一心丸は燃え盡く、亦て沈んで行った

生き色らの火葬、全く言ひ表しよりのない残酷の姿であった。
 日三丸号は一隻は舟火事か未だ沈没一隻は機銃掃射で
 舟は自由航行出来ず漂流、デッキにはあまの死屍を見
 て事終れりと見取つてか、と遠く飛び去つてしまつた。
 生き残れる者等の舟友福丸より積込の小傳馬を下し
 一心丸より海中へ飛込、泳ぎこぼる人々を救ひ上げ
 且取合、^松吾等、タンブル甘皿組五人を救ひ上げた。
 飛行機は去つたか友福丸は機銃掃射で所々穴あき
 海水の流入があり、機関は故障で航行が出来ない
 去知で乗組員を三組に分けて機関係は機関修理
 又一組は機銃跡の穴を塞ぎ、吾等の無敵組は水
 の吸波出し、又從事した。
 ドーヤウ穴塞ぎも出来水の波出しも出来たが機関はまた
 動かない、仕方なく向ふ合せの帆を作り出来得る限り
 人事を盡くして天候を待つ事となつた。去知より
 激働の結果空腹を覚ゆる事甚だし。

然る内みかたは遠く小島が見えた 呼喚の聲は

コーロコーロ島たしは島は近びとの舟員の叫びは一同

九死に一年分の望を得たもの末に 隊員の修理出

来す九分の不安を感じし居た

ア、動き出したとの修理組の叫びはア、ア、ア、と

一同九死に一生を得た喜びを感じ大奔りした

舟は航行の自由を得て小島指して行く途

中、小島、イヤ高知、底知のある大さ岩の底を裾

の込り三人の男が 手旗信号で叫び揺けて居る 漂着

一之居る故救助を乞ふとの信号なり 小島指して

本舟も空襲を念ひ 隊員故障幸して航行す 同

島へ来水と返信し 幸して小島へ着す

後日、小島へ来た 彼等三人は 殿様の軍人の一部

であつた事を解つた

一舟三隻の内一隻は舟火事し沈没の為 同舟を救助

せし人々は 弟の舟着る、一物もない

奥の
の
あり

辛^クして沈没を免れし一隻(字ナリ班乗込ノ舟)ナリ
大川班持多の米味増其の他の物資を陸上けした
ナリ班持多の米を供出しテ全公恩を賄ふ事ナリ
一日二食(朝晩)一食ニ付テ米の量はわががで沃山の草の
葉の雑炊で飢を凌ぐ

米の量は二三才の却見の食事後の飯茶碗ニ附着せる
飯粒又湯を注ぎし時茶碗の底ニ沈殿せる米粒の
量は程でした

十日五日程鑑流せる其同炊事も逐々同散する事
ナリ右自食物を漁り出向く

其のクハ島は大洋の真中黒潮の中ニ屹立せるハ島
祐野は僅大である祐野の流きけ自破で其流きけ
波の為メテゴボコのあるアハク面の平面の岩礁である
其の先は深い海で漁り出出来ない

山又はクハもあつたアダンバもあつた又葉の本がじマルはあまり
なかつた百合^{ユリ}が少々あつた長今草も少々あつた

ウ

ミイサ、ヨモギ、野ハシダ、其マは、あかつた

一葉の帰馳走はクバの若葉であつた断崖絶壁で素人
又は漁りか出まなない漁りも慣れた人は一人居つたか
外は唯たれ一人漁りをさる者も居ない

借借り蟹は自漬して食べ捨てた文である蛇も居ない

ヤモリ其他の小動物も居ない勿論大動物も見当つ

たかつた海辺の山石は井戸又マガイノ一ノ一か居たか其の

少しい動物は行動も敏捷で衰弱して行動の鈍くた

つたた虫等には捕まらない

食物は草のみだけなるも其草もあつた

見慣れない草もあつた初め少量を主味にして異状な

き時初めて少量を食べろ

後カニの食は食べるときは其味なるも主味物と見え

下二層を模様す故食つたあつた

アダンまの若葉は八重山でよく食べるので其の若葉の

付て居る如の草を試食したかカタクシ(カタクシ)食

られぬ

初はつの程はクハニ申まを頃ころの乳ち毛も（自分の身長位たかの乳ち）取りたるは銚ちやうるは却かえき返し執と力りきひ高たかきクハを却かえり取りたるは様ようのりりたつた 申まを頃ころのものは一回で却かえり取りたる

か出で来きるか高たかきもの初はつ回かい根ねを却かえり倒たおし二回目にかいめに若わか芽めの如ごとくおる為ためニ直ただは事ことなる

既すでに骨ほね差さ長なが不ふ良りやうの為ため力りきは脱だつけ体ていりけ減へし高たかきクハも却かえりたるあり草くさのみを食くべり為ため既すでに弱じやく

衰弱じやくじやくを来きせり三十日さんじふにち位ばかりより体てい力の弱じやくき者ものより死し亡じし初はつめた

今日けふは甲か力りき死しんだ 今日けふは乙おつか死しんだ

私わがの同どう伴ばんして来きた老らう姿そも死しんだ 毎まいも死しんだに父ちち

骨ほね差さ長なが失しつ調てうで体ていか動どうけたい寝ね起きか出で来きない

私わがも大だい分ぶん弱じやくて来きて二三にさん丁ていの道みちのりも体てい力りきの弱じやくき者ものより死し亡じした

無人むにん島しま上じやう陸りくを時ときり身み人にん其そのの為ため不ふ衛ゑ生せいとならぬあり

9 便所も一定の所を指定してあつたが身体衰弱するに至り其の中西女はき又至つた

便所(舟)を費ゆるや一定の場所迄行届かざる内は屍に出してしもう 男亦に瘦せ衰えたる結果屍の穴は弾力性がなく廻りかまききで持ちこたへる力か無かつたと思ふ

一前記の如く一心丸は舟火事で沈没せる為同舟乗込の人員は刃物金物其他一物もない

友福丸乗込の員少数持合せの刃物を交さ使用せり

一舟内は概銃又死亡せる屍は陸上せりし歟等

道具なき為岩のかけ又頭太り太き石を長方形に積上げ下より風の葉を敷き屍を並べ其上より風の葉をたいて風を吹き飛ばはせれぬより所々又石を置けり

一全島山林なりし為水は不自由なし

一日の終りに從ひ皆が弱衰するのて皆が弱衰せぬ中又其知せなげ水はなかつたこと協力の結果

幸又一行の中は舟大工一人居り工兵隊の部か居りまし

たので小舟を造る事とした

身体の働ける全員総動員で島を一周し難破舟の残骸を拾ひ集めて板を取り釘をぬぎ取り小舟を造り持合せの布や着目物で帆を作り舟員より決死隊を召集した

小屋の山さし台座で山さし 出陣までより 何工か連絡する事とした 決死隊を送り出してゆ安否をたずね

カミ尺つた三、四日後飛行機の轟音か聞ゆる 各自本の船乗りや岩陰けし身をかくしし空を覗く

ア、嫌しや日の丸の飛行機である 年の無き足踏を影を知らず日の丸くと 葉や叫ぶ内板は空に飛

りし何物かを落しとちった (葉無きで一空龍衣かあつた) 落物は何ならんと拾ひ上げ取る事も出来しと用けて

見ればビスケット、コンパイ糖等の土産であつた 一日大急が

早急分配 アアエー助だたと不充分色ら腹つ、みさうちニ、目申又救舟か来ると喜ぶ合ひえ水よりえ

11
身に百倍した

決死隊が川平へ着いたその時佐でわかれた

それより三日目か又救助舟三隻か来た時校も軍

一匡山見えた

一同へ行く

今因は人質だけを救助し来た

た敵の荷物の舟の積んで積ではなうぬ 荷物積み

度き人は次因 途待の様一止との事 左れも次因迄

待の者は居ない

然し乍ら元氣の人々は全額でなくとも向介も持込み

ました 私は母を亡くした女を亡く父は官俸で人に

オバサして乗舟し私も幸して乗舟したので母のみの

美作まであった

軍の命令であったのか八重山へ帰島迄は唯一人休戦を

知らず者は居らなかつた

それ故帰島途中も又も水之龍女と出会ひはしたのかと

心(歌)した

私親(父)又は二人芝橋橋よりシガで戻はれて懐かし

き我家へ帰つた

ふとちかえり

いづるは

88
人々

妻女又子三人計四人の内娘一人元身て三人はマウリヤ
と名やまるといふ 今一月よりややえ身又なつたとの事であった
管着の矢調の為め一六は帰島位十八日目の死に私に
七ヶ月目よりよりやく扱又あかりと云ふ事か出来た
初めの四ヶ月間はオシメと云ふ大い使ノ用を度して
居つた

疎肉を時九十九斤の体かようやく歩けるありて
隣りの酒屋のカシクで計りし知え五斤又激減して
居つた オソウリノ病身最高潮の時ハ半分又減
して居つた思ふ

思へが冥土の玄奥位にて参り運ぶく門前
折りを食ひ九死又一生を得た事を去のとなき
幸ひと思ふて居ります

冥土の旅行記地獄の旅行記を記する如件
尚ほ一冊を戦争なるからん中と祈りて世みませんかに
一九五八年五月廿八日 石垣市一七八 宮島長吉七十三才

火調拜島費難者懸屋學式煙

一開式のニハ

一入修想懐

一號狂供春

一平長世博のニハ

一建立善住者燒香及心礼拜

一並旅代者燒香及心礼拜

一参列者代者燒香及心礼拜

一開會のニハ

必開式のニハ

建立善住者燒香

市長

並旅代者

宮良当智

参列者代者

若山助役

開會のニハ

總務課長

司會